

# 『妙法華』における「読誦」について

vācayati ㇏ svādhyāya

荊谷玄翁(定彦)

漢訳大乘經典には「読誦」(「読」、「誦」、「諷誦」などを含めて)の語が頻繁に出てくるが、その意味内容について、『法華經』に限って、サンスクリット語に溯って考察してみたい。

それというのも、「読誦」という語についての現代日本語、のみならず漢字のもっている意味内容と、その原語とされるサンスクリット語との間には、見過すことのできない相違があると考えられるからである。

## 一

現代日本語にあって、「読」という語は圧倒的に「書物(文字)を読む」というように、書かれている内容を理解するという意味であるが、ある国語辞典を見るに「○文章・詩歌などを声を立てて唱える。㊦文字・文章を見てその意味を理解する。㊧数をかぞえる。㊨「詠む」詩歌を作る。詠(えい)ずる。㊩人の心の中などを推察する。㊪囲碁・将棋などで、先の手を考える。」とあって、単に「○文字・文章を見てその意味を理解する」というだけではなく、むしろ本来的には「○文章・詩歌などを声を立てて唱える」という意味内容であったと思われる。そう言えば、「読み、書き、そろばん」、「読み合わせ」、「読み手、聞き手」などの「読」は全て第一義的には「声を出す

『妙法華』における「読誦」について

こと」そのものと言ってよく、「内容を理解する」という意味は背後にしか存在しない。

このことは「読」という漢字そのものに起因しているのであって、ある漢和辞典には、「読」の冒頭に「声を立てて書物を誦する」とあり、「誦」とは「そらんずる」とあって、声を出すことがその第一義であったことが示されている。「素読」、「読書百辺義自見」、「論語読みの論語知らず」などの「読」がこの意味であることは言うまでもない。

このように今日、「声を立ててそらんじる」という「読」の本来的な意味が殆んど失われてしまった状況にあつて、「読経」という場合にはよくその意味が存続していると言えよう。凡そ声を出さずしては、決して読経にはならないことから、明白なところであり、それでこそ「門前の小僧、習わぬ経を読む」という文の意味が理解できるというものである。それ故、『仏教語大辞典』には「読」は「声を出して読むこと」とあり、「読誦」については、「また読経ともいう。声をあげて経文を読むこと。文字を見て音読するのを読、文字を見ないで音読するのを誦と<sup>6</sup>いう。看経の対」と説明されているところである。

このように、「読経」と言えばそれは必ず「声を出して経をそらんじる」即ち「音読」を意味するのであるが、それでは「読書」が通常は黙読であるのに対して、なぜ「読経」は音読即ち声をださなければならないのか。これは一見、愚問と思われようが、しかしそれに対する明確な解答は日本仏教や中国仏教の中では決して得られないのではなからうか。ここに、インドまで溯って、一体「読」や「読誦」と訳されたサンスクリット語が何であるのか、それを考察する必要があると思われるのである。

漢訳經典において、「読」、「読誦」と訳出されたサンスクリット語については、『仏教語大辞典』においてすでに先挙げたところの「読誦、また読経ともいう。声をあげて経文をよむこと。文字を見て音読するのを読、文字を見ないで音読するのを誦という」のに対応する“*vācyaṇāna*”と「修行僧たちが反省・攻究・思念の資料を得るため、教団内で低声に仏典を読誦すること。経をよみ口ずさむこと。」に対応する“*svādhyāyana*”の二種があることが明らかにされている。<sup>(9)</sup>

このことは『妙法華』<sup>(8)</sup>においても全く同様であって、「読」、「読誦」、「誦」、「諷誦」と訳されているサンスクリット語には、大きく分けて *vācayati* と *svādhyāyana* の二種があるのである。

*vācayati* は「vac (言う、語る、告げる) の使役相であって、「話させる、言わしめる」という意味をもっていることは当然であるが、しかし単純に「語る、告げる」という意味でも広くもちいられているものである。それ故、*vācayati* には、殊更に「声を出す」という意味があるわけではない。もちろん、声を出さずしては「語る、告げる」ことが不可能であることは明白ではあるが。

『法華経』において、このような意味で用いられる「vac の使役相の語は、序品から如来神力品に至る「原初的法華経」<sup>(9)</sup>（但し提婆達多品を除く）にあつては、法師品以下に二十五回用いられている。いま、この語の極めて典型的な用法を示していると考えられる初出の箇処の全文の文章を挙げてみよう。

(A) 葉王よ。仏滅後にだれかある善男子・善女人がこの法門を聞くとする。それはたった一偈を聞いてたった一瞬間、随喜するだけであつても、葉王よ、私（＝釈尊）はそのような善男子・善女人に対して（いつか必ず）無上等正

『妙法華』における「読誦」について

『妙法華』における「読誦」について

覚を得ると授記（＝資格を有することを証）する。<sup>13)</sup>

- (B) (ましてや) この法門からたった一個でも (聞いて後) ①憶えんとする (dharayisyanti) ②(他人に) 語って聞かせる (vacayisyanti) とする、③説明する (prakāśayisyanti) とする。④十分に理解せよ (saṅgrāhāyisyanti) とする、⑤文字に書く (likhisyanti) とする。文字に書いた後、(内容について) 思念する (anusmarayisyanti) とする。時時に観想する (vyavalokayisyanti) とする。また、その(文字化された) 書物 (＝経巻) に「如来だ」という尊敬の念 (tathāgata-gaurava) を起こすとする。「師匠だ」という尊敬の念でもって、恭敬し、尊敬し、尊重し、供養するとする。そして、その経巻を花、薫香、香水、華鬘、塗香、粉香、衣、傘、旗、幢、音楽などや礼拝、合掌でもって供養するとする。そういう善男子・善女人は(すでに過去の無量生において) コーティ・ナユタ・百・千を満たす仏たちに仕えてきた(＝ぼさつの自利行) ものであるだろう。そののみならず、薬王よ。それら善男子・善女人はそれらコーティ・ナユタ・百・千の仏たちのもとで(すでにぼさつとして) 誓願を立ててきたものであり、衆生を慈しむが故にこの閻浮提の人々の間に生まれてきた(＝ぼさつの利他行) ものであると知るべきなのだ。<sup>12)</sup>
- (C) (そういうわけだから) 薬王よ。(仏滅後に) だれかある善男子・善女人がこの法門からたった一個でも (聞いて) 憶え、(一瞬間でも) 随喜するならば、私はそれら全てのものに(いつか必ず) 無上正覚を(得ると) 授記する(＝資格を有することを証する) のだ。<sup>13)</sup>

これは、この文段に先立って(＝法師品の冒頭) 仏の面前で(＝仏在世) この法門を聴聞している声聞、独覚、菩薩の三乗の人々に対して、「一切衆生は本来よりぼさつ(＝成仏確定者)」という方便品に明かされた仏知見(仏

智にもとづく直観<sup>15</sup>）にもとづき、正覚に向けて授記<sup>16</sup>したのをうけて、今度は（仏滅後）の一般大衆に対して、この法門を聴聞する限りにおいて、だれであれそのものは本来よりぼさつ（成仏確定者）であるが故に、成仏の資格を証明（＝授記）しているところである。その場合、両者ともに「この法門」即ち『法華経』の聴聞が必須の条件となっているのは、「一切衆生は本来よりぼさつ」という仏智を説き明かしたものは、この『法華経』（なかんづく方便品）を措いて他にないからである。<sup>16</sup>

ところで、この一段の文章からだけでも、「この法門」即ち『法華経』というものが、インドにあってはそれは仏教經典のみならず広く全ての宗教聖典に該当するのであるが、基本的には「ことば」であって、決して「文字」ではないことが明白に窺いうるであろう。そして、「ことば」は、他人<sup>17</sup>より聞いて覚え、今度はそれを他人に聞かせていくという一連の行為の中においてこそ存在しうるものと言えよう。それ故に〔B〕の①dāraśyantiは、多くの場合「受持」と訳されてきたが、その聞いたところをしっかりと、あるいは完全に記憶するということ、それより他にはいかなる意味も持ち合わせていないのであって、「憶持」という訳語こそ最も相応しいものであったと考えられる。<sup>17</sup>

次に、そのように「この法門」即ち『法華経』をすっかり記憶、憶持したとして、一体それが何だというのであろうか。それだけならば何の功德も利益ももたらさないのではないだろうか。それ故、ここでは何のために憶持するのかということが問われるべきなのであり、その答えこそが②vacāśyanti（憶持しているところを他人に）語って聞かせる「ことに他ならない。逆に言えば、あくまでも「語って聞かせる」ための、それに先行する「憶持」にすぎないのである。それ故、経文に「憶持する」としかなくても、それは必ずその後「語って聞かせる」という語があることを知らねばならない。その絶好の例が、如来神力品の最終偈（それは『法華経』全体を総括する結

『妙法華』における「読誦」について

文に他ならない)である。

「私(≡釈尊)の滅後にこの經を憶持すべきである。そのような人には覺り(を得ること)についての疑はありうべくもない。」<sup>18)</sup>

『於我滅度後 応受持斯經 是人於仏道 決定無有疑』<sup>19)</sup>

この經を憶持する人は、「一切衆生は本来よりぼさつ」という仏智にもとづき、もとよりぼさつ(≡成仏確定者)ではあるが、しかし、ただこの經を憶持するだけで仏果の得られるはずもないのであって、その憶持するところを他人に語って聞かせるとき、はじめてそれはぼさつの利他行となり、そのぼさつ行によってこそ、覺りという仏果を獲得しうるのであり、そこに一片の疑いもないことを述べるのがこの偈に他ならない。

かくして、*vācayati* (√*vac* の使役相) は単に「語る、告げる」というよりは、「他人に語って聞かせる」という意味内容をもった語であるといえよう。この *vācayati* が中国では「読」、「読誦」と漢訳されたのであるが、しかし、それはサンスクリット語のもつ意味からは大きく掛け離れたものであったと言わざるえない。なぜなら、*vācayati* も「読」も、共に声を出すことにおいては同じであつても、「読」はどこまでも書かれた「文字」を声を出して唱えるというのに対して、*vācayati* (語って聞かせる) には「文字」は全く介在せず、あくまでも「ことば」である。その上、「読」には、*vācayati* が持っているところの「他人に向かつて声を出す」即ち「他人に語って聞かせる」という肝心の意味が全くと言ってよい程、含まれていないと言ってよいであらう。

次に、③ *prakāśayisyanti* は、その語って聞かせたところを説明すること、「解説」することであり、これに続

く④saṅgrāhavyanti は、同じく語り聞かせた内容を相手に十分に理解させることを意味している。

以上の①、②、③、④のうち、根幹をなすものは、あくまでも②「他人に語って聞かせる」にあることは言うまでもないであろう。そして、この憶持したところの経を他人に「語って聞かせる」即ち唱導する人々の活躍こそが初期大乘仏教と呼ばれるものの実態に他ならない。この意味において、そこに登場してきた様々な初期大乘経典は「唱導文学」であり、それら経典の唱導者たちが、総じて「仏法(ダルマ)の語りべ(バーナカ)」(dharma-bhāṅka || 「法師」)と呼ばれたことはすでに明らかにされてきたところである。

次の⑤īkṣiyanti は、漢訳においては「書写」と訳されてきたものであるが、これはまさしく本来的には「ことば」である『法華経』を文字化する、即ち「文字に書く」という意味にすぎない<sup>20</sup>。次にそれでは「経」を文字に書いて何になるのか、と問うならば、先の「憶持」の場合と同様、それだけでは何の功德も産み出さないであろう。ここにおいても、何のために「ことば」を文字化する(経を文字に書く)のか、と問うべきなのであり、この後に説かれているところこそ、それに対する答えに他ならない。それによれば、まず第一に、「文字に書いて後、(法華経の内容を)思念し、時々に見想する」ためである。これは、経の唱導者(=ダルマ・バーナカ、法師)が、唱導という対外活動のあけくれの中にあつて、再めて自己の唱導している経の内容を検証し、それを布教してゆく上での確信を深めるための自己研鑽、あるいは深い反省を意味しているのであり、そのための「ことば」の文字化である。第二には、同じくこの経の唱導者自身が、文字化された書物即ち『法華経』の経巻に対して、〈仏滅後〉にあつては、『法華経』という仏の教え(「ことば」)は如来そのものだ」という尊敬の念を起こし、仏在世にあつては仏こそ師であるのに対して、〈仏滅後〉にあつては師はこの『法華経』より他にないという尊敬の念から恭敬し、尊重し、尊敬するためであり、その具体的行動が花や香、音楽による礼拝、供養である。

『妙法華』における「読誦」について

『妙法華』における「誦誦」について

ところで、この花や香、灯明を捧げる礼拝・供養（ブージャー）は、インドにあつては一般大衆（在家）の宗教の根幹であつた。解脱を目的とする出家の宗教に対して、出家のみなわぬ一般在家の人々はこの礼拝・供養によつて善根功德を積み、その得果としてせめてもの「現世安穩、後生善処」を願うのであつたが、この当時の一般大衆の仏教（のちに大乘仏教を産む）にあつては、礼拝・供養は、それがいかに遠い将来であつても、いつか必ず正覺の獲得即ち成仏に至る道、即ちぼさつ行としてのものに質的転換を遂げていたのである。それ故、ここに説かれてゐる經卷に対する礼拝・供養は、先の『法華經』を憶持し、それを語つて聞かせ、説明し、理解させるといふがぼさつの利他行であるのに対して、まさしくぼさつの自利行と解すべきものである。

その上、『法華經』に説かれてゐる仏塔信仰は、見宝塔品に見事に説き明かされてゐるように、単に仏舍利を納めた容器として、あるいは墳墓として仏塔を礼拝・供養するといふものではない。《仏滅後》にも拘らず、仏陀釈尊は仏塔において生きて在しますという宗教感情（信仰）に依拠するものである。それと全く同様に、この經卷に対する礼拝・供養も単に經典尊重、所謂「經卷供養」ではなく、經卷において生きた仏陀を見る宗教感情に立脚した礼拝・供養であり、この經の唱導者自身の明確な自覺にもとづくものであることを知らねばならないであろう。このことを明示せんとして、經卷に如来だといふ念を起こし、師といふ思ひから礼拝・供養すべきだと述べられてゐるのである。

それでは、どうして『法華經』は如来そのもの、血潮の通う美しい肉体を備えた仏陀であるのか。それは、この『法華經』のみが、「一切衆生は本来よりぼさつである」といふ仏智（仏知見）を衆生に示し、乃至その道に入れしめるという「ぼさつを鼓舞すること」(bodhisatva-samadāpana 「教化菩薩」といふ仏出世の本懐を明かしたものであり、しかもその上、如来寿量品において、「良医治子の喩」が示すように、仏入滅の本懐を明かすもの



またこの『法華經』のみであるからである。この仏の出現と入滅の当体に久遠実成本仏釈尊のいのちがあるのである。<sup>24</sup>「この經を文字化して、經卷を肩に担うものは、如来を肩に担うものだ」という有名な文も、かかる信仰の発露に他ならないと言えよう。

このように⑤「經の文字化」(「書写」)はあくまでもこの經の唱導者自身のぼさつの自力行であるが、②「語って聞かせ」、③「説明し」、④「理解させる」ことが全て他人に向っての行為即ちぼさつの利他行であることを考えるならば、この「經の文字化」もまた「他人のために文字化する」即ち「文字化して、それを『読んで下さい』と他人に渡す」という意味も含まれていると解することは可能であろう。しかし、その場合、当時の一般大衆の中ではたしてどれだけの人が文字を読めたのか、即ち識字率を考慮するとき、この唱導としての、即ち布教活動としての「文字化」(書写)のもつ力はさほど大きくはなかったと言わざるをえないであろう。

以上の①、②、③、④、⑤を羅什は「受持読誦解説書写」と漢訳し、これをうけて中国では天台は「釈法師品」此品五種法師。一受持二読三誦四解説五書写」と注釈し、この見解は今日にまで至っている。しかし、インドに溯って見るときには、法師行に五種類があるとは到底考えられない。法師行の根幹をなすものは、一にも二にも②「(他人に)語って聞かせる」(vacayati)ことであって、①「憶持」はその「語って聞かせる」ための前提たる準備行為にすぎず、③「説明する」と④「理解させる」とは、②「語って聞かせる」ことから派生した、補充行為もしくは付随行為であると言えよう。⑤「文字化」(書写)にいたっては、唱導即ち布教活動と言えるかどうか、少しく躊躇せざるを得ないほどのものである。

インドにあつては、凡そ「經」は、その冒頭に「私は以下のことを仏から聞いた」(「如是我聞」とあるように、仏のことば)であり、『法華經』のように、歴史的には仏以外のものの所産であろうとも、それはあくまで「仏

『妙法華』における「読誦」について

の「ことば」として信得されたものである。そして、「ことば」は他人から聞いて憶持し、それを他人に語り聞かせるという一連の行為なくしては存在しえないことから明かなように、②<ka>の使役相こそが、この「語って聞かせる」という重要な概念を表わすサンスクリット語なのである。

尚、『法華經』にあつては、この<vac>の使役相の他に、<bhās>（語る、話す）や、<śru>の使役相（聞かせる）、それに<śi>の使役相（示す、説く）というような語が用いられている。そして、そのいずれもが『妙法華』では「読」あるいは「読誦」と漢訳されているのである。しかしながら、はたして「読」や「読誦」に、そのサンスクリット語のもつ「他人に聞かせる」という意味をくみとりうるであろうか。そこに、「ことば」文化のインドと文字文化の中国という両者の文化の相異を考えざるをえない。

三

次に、「読誦」と漢訳されるもう一つのサンスクリット語に *svādhyāya* がある。これは、比丘（＝出家の専門修行者）が僧院の各自の部屋で、あるいは戸外の静かな所で、一人で仏の教説を口ずさみながら憶えること、「暗誦」というのがその意味内容である。この「口ずさみながら憶える」即ち暗誦という行為は、「ことば」の文化圏に属するインドにあつては極めて重要な学習形態であるといえよう。それ故、この *svādhyāya*（暗誦）は『法華經』においても、伝統ある僧院仏教の比丘であれ、大乘の菩薩であれ、要するに出家専門修行者の学習行為として盛んに述べられており、序品から如来神力品に至る間、十五箇処に出てくる。<sup>28)</sup>

「私（＝弥勒菩薩）は、次のような菩薩たちが（東方万八千の国々にいるの）を見る。（即ち）あるものは比丘

となって（＝出家の菩薩として）林に住し（瞑想に専念し）ており、あるものは人気がない森に住して『標説』(uddeśa)<sup>(29)</sup>と「暗誦」(svādhyāya)を楽しんでいる<sup>(30)</sup>。」

というのが、その初出である。法師品には、この経の唱導者即ち法師のなす行為の一つとして、法華経の暗誦という意味で、次のような記述がある。

「荒野であれ、山岳であれ、人気がないところでたった一人で住み、（法華経の）暗誦をしている<sup>(31)</sup>。」

「その人（＝法華経の法師）に対し、私（＝釈尊）は（私の）光り輝く身体をそこに現わして、彼の（やっていた）法華経の（）暗誦で忘失した（ことば）を繰り返し繰り返し口うつつにつぶやく<sup>(32)</sup>。」

このような「暗誦」(svādhyāya)は、基本的には出家修行者に属する教法学習の一つであって、たとえそれが声を出してのものであっても、前述してきた「語り聞かせる」(vācayati)のように、他人に向けての布教活動とは全く次元を異にするものであり、このことは十分に理解されなければならない。そうすれば、法師功德品の第十六、第十七偈は次のように訳すより他ないであろう。

「ここで、善逝の教法領域下で、出家して比丘（となった）ものたちが（僧院にあって、声を出して）『暗誦』（教法の学習）をなしているところのそういう人たちの声と、（一方では、広く巷に出て）集会にあって教法（＝新興の大乗仏教経典）を説き示している (desayate) ところの（それら法師たちの声との両方）を、彼（＝法華

『妙法華』における「読誦」について

『妙法華』における「誦誦」について

經唱導の法師)は(六根清淨の故に)常に(生身の耳で)聞くのである」(第十六偈)

「この世界で、(出家の)菩薩たちが各々別々に『暗誦』をし、そして(その憶えた)教法の合誦(=各自の憶持に誤りがないかを確かめるために、全員が一緒に声を揃えて誦すること)をなすところのその人たちの種々な声を彼(=法華經の法師)は聞くのである。」(第十七偈)

このように、出家修行者の学習形態の一つたる「暗誦」(svadhyaya)が、中国においては先述の法師の布教活動の根本たる「語って聞かせる」(vacayati)と何らの区別もなされずに、「誦誦」と訳されてきたのである。このことは漢訳『妙法華』においても全く同様であるが、しかし、全く意味内容を異にする vacayati と svadhyaya が共に「誦誦」と訳されたとき、そこには、多くの問題が生じていることは当然であろう。その最たるものとして、常不輕菩薩品の次のような箇所を挙げることが出来る。

周知のように「常不輕菩薩」は(仏滅後)にあって「菩薩」にしてかつ「比丘」であったとされ、それ故に

「その菩薩は比丘でありながら(比丘、出家修行者として当然なすべきところの僧院における)『標説』をなさず、(同じく比丘として当然の)『暗誦』をなさず、(巷に出ては)たとえ遠くに見ても、その人に近づき、次のように聞かしめる(samśravayati)のであった。即ち、比丘であれ、比丘尼であれ、信男であれ、信女であれその人に近づき、次のように告げる(vadati)のである。

『ご婦人方よ。私はあなた方を軽んじません。あなたがたは軽んじられない』(a-parihīta)方がたです。どうしてかといえ、あなた方はすべてぼさつ行を行じなさい。(そうすれば、必ず)あなた方は如来・応供・

等正覚者となられるからです』<sup>37)</sup>

この一段を羅什は次のように漢訳しているのである。

「而是比丘 不專読誦經典 但行礼拝 乃至遠見四衆 亦復故往 礼拝讃歎 而作是言 『我深敬汝等』 我不敢於汝等 (所以者何 汝等皆行菩薩道) 汝等皆当作仏故』<sup>38)</sup>

ここで、梵漢対照すれば極めて明白なように、「不專読誦經典」とは「菩薩比丘」であった常不輕菩薩が、比丘としては当然なすべきところの、僧院の部屋にこもって「暗誦」という教法の学習をなさなかったことを言ったものである。ところが、その「暗誦」(svādhyaya)を羅什は「読誦經典」と訳したために、常不輕菩薩はまるで「受持読誦解説書写」の法師行を全く放棄したもののように受け取られているのである。その上、羅什は、極めて恣意的にとしか思えないが、梵本には微塵も存しない「但行礼拝」「礼拝讃歎」というものをここに持ち込んでるのである。そのために常不輕菩薩は「読誦經典」即ち「經典を人々に語って聞かせる」という肝心の法師行を全くせずに、ただ相手かまわず「但行礼拝」する、何か一種の「変りもの」というイメージが定着してしまっているのである。しかし、そうではないことは梵本を見れば明々白々であろう。常不輕菩薩は僧院にとじこもることなく巷に出て、男女老若を問わずそこに見かけた人々全てに向って「私はあなたを軽んじません。…ぼさつ行を行じなさい。必ず仏になられるのですから」と「聞かせている」(samśrayati)のである。これが、自己の信ずるところを一人でも多くの人々に伝道しようとするもの、布教活動にして、ぼさつの利他行でなくして何であろうか。それにも拘らず、常不輕菩薩の僧院における暗誦をしないことが「不專読誦經典」と訳出され、その上に「但行礼拝」「礼拝讃歎」という、梵本にはその片鱗すらもないものが持ち込まれて、この二つのいわば相乗汚染によって、肝

『妙法華』における「読誦」について

『妙法華』における「読誦」について

心の常不輕菩薩の「ぼさつ行を行じなさい。仏になれますから」と誰れかれなしに聞かせてまわった布教・伝道活動、このすばらしいぼさつの利他行が、『妙法華』を読む限りは、全く覆い隠されてしまっている、といっても決して過言ではないのである。

以上、『妙法華』に表われる「読誦」のサンスクリット語に *vacayati* (語って聞かせる) 等と *svādhyāya* (暗誦) の二種があり、しかもそれらは次元を異にした全く別々の意味内容を持ったものであることを述べた。しかし、このようなことはすでに周知のことがらであって、小論はそのことを『法華経』の上で、再確認したにとどまるものと言えよう。

そして、この「読誦」という訳語は、現代日本語の語感からすれば、*vacayati* の訳語としては不適當なものとなっており、そうかといって、*svādhyāya* の訳語としても決して相応しいとは考えられない。*vacayati* は「(他人に) 語って聞かせる」、*svādhyāya* は「(教法の) 暗誦」というのが適當なところではないだろうか。

今日、日本仏教にあって「読経」即ち仏前で声をそろえて経を誦するというのが儀礼として定着しているけれども、そのルーツをたどれば、それはインドにおけるこの初期大乘經典の一般大衆への唱導、即ち法師が男女老若を問わず在家の人々に自己の奉ずる經典を語って聞かせたことにその源があると言えるのではないだろうか。換言すれば、初期大乘經典そのものが、とりもなおさず一般大衆への布教伝道の書、まさしく「語りもの」であったということであろう。日本において、平安中期以後、盲僧たる琵琶法師が琵琶を演奏し『平家物語』を語って聞かせたという<sup>9)</sup>。このことは、『平家物語』があくまでも「ことば」であり、琵琶法師によって「憶持」され、それが他人に「語って聞かせる」ところに存在したこと、その法師は僧というよりは「語りべ」としての法師即ちダルマ・パー

ナカ(仏法の語りべ)であったことを示すものである。そこに、インドにおける法師による初期大乘經典の唱導の実態をイメージすることが可能ではないかとさえ考えるものである。

注

- (1) 『広辞林』第五版(三省堂)二〇二二頁。
- (2) 『大漢和辞典』(大修館書店)巻十、六〇九頁。
- (3) 前掲書、四八二頁。
- (4) この「読」は「声を立てて誦する」の意であるのにも拘らず、「乱読を戒め熟読の必要を説いたもの」(『広辞苑』初版、岩波書店、一五四一頁)や、「繰り返し熟読する」(『広辞林』第五版、一四二一頁)と説明されている。そこに、まさしく小論の問題とするところが浮彫りにされていると言えよう。
- (5) 中村元『仏教語大辞典』(東京書籍)下、一〇三三。
- (6) 前掲書、下、一〇三三4。
- (7) 注(6)に同じ。
- (8) 鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』(『妙法華』(『大正蔵』九、一〇六二頁)。  
拙著『法華経一仏乗の思想』(『一仏乗』(東方出版、昭58)五三頁参照。
- (9) 『土田本』(『荻原・土田『改訂梵本法華経』)により示す。①P.196.21. ②P.197.18. ③X-3. (『法師品第十の第三偈) ④P.201.11. ⑤P.202.21. ⑥P.253.7. ⑦P.253.16. ⑧P.286.15. ⑨P.287.2. ⑩P.287.17. ⑪P.287.26. ⑫P.288.11. ⑬X V I-48. ⑭P.296.11. ⑮P.300.3. ⑯P.313.20

『妙法華』における「読誦」について

『妙法華』における「読誦」について

- ①P. 315. 15. ⑧XV Ⅲ—75 ⑩P. 318. 8. ⑪P. 323. 3. ⑫P. 323. 23. ⑬P. 323. 26. ⑭P. 327. 8. ⑮P. 330. 25. ⑯P. 330. 27.
- (11) 『土田本』 P. 196. 11~15.
- (12) 『土田本』 P. 196. 15~P. 197. 2. 『大乘仏典 5 法華経Ⅱ』（中央公論社）の訳（八〇九頁）や『岩本裕訳』（岩波文庫『法華経』中、一四二頁）には、シNTAXクスに誤りがあると思われる。
- (13) 『土田本』 P. 197. 2~5.
- (14) 拙稿『諸法』と「仏知見」と「衆生の自性」—法華経方便品の構造』（種智院大学学舎竣工記念論文集『仏教万華』平成四、六一〜八八頁）参照。
- (15) 拙著『一仏乗』、三二二〜三二七頁参照。
- (16) 拙稿「法華経修行道の構造—法師品の研究」（『日本仏教学会年報』第四十五号、九九〜一一四頁）参照。
- (17) これに対して、『受持』とは、經典の意義を了解し、信じて受けとめ、忘れないで心にとどめおくこと」（仏典講座7、『法華経』上、大蔵出版、昭63、五三〇頁）とか、「受持とは、大切なものとして、常に肌身はなさず持っていること」（太田利生『無量寿経の研究』永田文昌堂、平成二、一六二頁）とか、説明されている。
- (18) 『土田本』 P. 333. 16~20. (XX—14)
- (19) 『妙法華』（『大正蔵』九、五二頁下）。
- (20) 拙稿「法華経における書写、経巻供養、仏塔建立—法師品の研究（Ⅱ）」（『密教学』第十八号、四五〜六〇頁）参照。
- (21) 拙稿「仏塔・ボサツ・大乘仏教—仏教における在家道」（仲尾俊博先生古稀記念『仏教と社会』平成二、五二



（七七頁）参照。

(22) 前掲拙稿、六六～六七頁参照。

(23) 拙書『一仏乘』、八八～一一〇頁参照。

(24) 拙稿「法華經における仏陀観—歴史的仏陀からの脱却の道」〔密教学研究〕第七号、七一～八五頁）参照。

(25) 『土田本』P. 198. 14～16.

(26) 『妙法華』（『大正蔵』九、三〇七）。

(27) 『妙法蓮華經文句』卷第八上（『大正蔵』卅四、一〇七頁ト）。

(28) 『土田本』によつて示せば、①I-22. ②I-91. ③P. 201. 13. ④P. 202. 21. ⑤X-30. ⑥X-31.

⑦X-33. ⑧P. 262. 14. ⑨XVⅢ-16. ⑩XVⅢ-17. ⑪P. 304. 21. ⑫XVⅢ-46. ⑬XVⅢ-48.

⑭P. 320. 9. ⑮P. 330. 27.

(29) *uddeśa*は、六箇所（前記の①、②、⑧、⑫、⑬、⑭）では、全て *svādhyāya*（暗誦）と一緒になつて出てくる。それ故、比丘の教法学習形態の一つにして、何か標題を出して、それについての比丘間の討議、論議の意味であらう。

(30) 前記の①、『妙法華』「或見菩薩 而作比丘 獨処閑静 案誦經典」（『大正蔵』九、三上）。

(31) 前記の⑤、『妙法華』「若説法之人 独在空闲处 寂寞无人声 誦誦此經典」（『大正蔵』九、三二中）。

(32) 前記の⑥、『妙法華』「我爾時為現 清浄光明身 若忘失章句 為説令通利」（『大正蔵』九、三二中）。

(33) 前記の⑨、『妙法華』「一切比丘衆 及諸比丘尼 若誦誦經典 若為他人説 法師住於此 悉皆得聞之」（『大正蔵』九、四八中）。

『妙法華』における「誦誦」について

『妙法華』における「読誦」について

(34) 前記の⑩、『妙法華』「復有諸菩薩 読誦於經法 若為他人説 撰集解其義 如是諸音声 悉皆得聞之」(『大正藏』九、四八中)。

(35) これは、初めの「呼びかけ」が「尊者がたよ」と男性へのものであったのに対してのもので、そのもつ意味は大きい。拙稿「法華經における女性」(『日本仏教学会年報』第五十六号、一八五—二〇〇頁)参照。

(36) 「常不輕」の原語 *Sadaparibhuta* は、*sada-paribhuta* 「常に(会う人全てに)『あなたは』 軽んじられない」(方です)』と言ったもの」と解すべきであろう、拙稿「大乘教団としての法華者団」(『日本仏教学会年報』第三十九号、一〇三—一二六頁)の注(17)。

(37) 『土田本』P. 320. 8—15.

(38) 『妙法華』の二箇所(『大正藏』九、五〇頁C)を組合せた。

(39) 『綜合仏教大辞典』(法蔵館、昭62)下、「盲僧」の項(一四〇五頁)。

付記 小論は太田利生『無量寿經の研究』(永田文昌堂、平成二)に「ところで、読誦の意味について知ろうとするばあい、漢訳にたよらず原語の意味内容を知ること必要であろう。もっとも、読誦するという原語にも多様な動詞が存在しているようであるが、『無量寿經』では、*vacayisyanti* (vac) が用いられ『法華經』では、*svadhyāyitam* (dhyai) が使われている。前者は、話すという動詞の、後者は、観想を意味する動詞から変化したものである。したがって、同じ読誦と漢訳されても、本来の意味は異なるのである。ことに、『法華經』のばあい、読誦することによって、冥想的、心理的なある状態に入っていくという内容をもっていると考えられるのである」(一六四頁)とあるに触発されたものである。